Osaka University Knowledge Archive

Title	日本語の固有語と高級語彙の使い分けについて : 英日通訳の授業から
Author(s)	小倉, 慶郎
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2017, 15, p. 19-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60428
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

日本語の固有語と高級語彙の使い分けについて
― 英日通訳の授業から ―
How to Use Indigenous Words and Chinese Loanwords Properly in Japanese Oral Expressions

小倉　慶郎

【要旨】

「語種」によって日本語を分けると、和語（大和言葉）、漢語（字音語）、外来語（西洋語）、混種語に分けるのが一般的である。『新選国語辞典』第９版（小学館）には、収録した一般語の内訳が、和語33.2％、漢語49.4％、外来語9.0％、混種語8.4％であったことが記されている。本稿では、この中でも、和語を「固有語」、漢語を「高級語彙」と位置づけ、英語と比較しながら、日本語の口頭表現、特に英→日通訳の際に好ましい「固有語」「高級語彙」の使い分けがあるのかどうかを探っていく。英語の高級語彙は、古典ギリシャ語、ラテン語であり、固有語はゲルマン系の語が相当すると考えられる。日本語では、高級語彙は中国語（漢字の音読み）が、固有語は大和言葉（訓読み）が相当すると考えてよいようだ。日本語、英語を問わず、高級語彙は、聞いてわかりにくく格式ばった状況で使われ、固有語は聞いてわかりやすく、くだけた状況で使う傾向がある。また、これに関連して漢語の呉音、漢音、唐宋音を取り上げ、日本語の音読み、訓読みについて留学生に説明した実践例も紹介したい。

はじめに

筆者が、本センターで通訳演習の授業を始めてから10数年になる。本センターで留学生を教えながら、併行して他大学では日本人学生に通訳演習を行っているため、留学生と日本人学生双方の共通点やそれぞれの問題点が浮き彫りになる。授業をしていて常に発見があり、興味が尽きない。基本的に両クラスとも英語・日本語間の通訳演習を行っているから、日本人クラスは当然のことながら英語よりも日本語がはるかにできる。一方留学生クラスは、しばしば英語の母語話者が受講していることもあり、英語の流暢さだけを比べるとはるかにうまいが、日本語はさすがに日本語母語話者と互角まではいかない。英→日の訳出だけを見ると、両クラスとも、共通の間違いを犯すことがある。ほんの一部であるが、日本人、留学生ともに次のような日本語を使う生徒が初回の授業で出てくる。

（留）学生：1990 年代以降日本の経済成長は停滞状況が続いている。

この機会を逃さず、筆者は生徒に向かって指摘する。

教師：この日本語の何がおかしいか、皆さんわかりますか。これは「1999年代以降日本の経済成長は停滞状況が続いています」としなければなりません。日本語の話し言葉は「です・ます」調を使い、日本語の書き言葉は「である」調を使うのが原則だからです。たとえば、新聞に次の文章が書いてあるとします。

気象庁によると21日午後２時７分ごろ、鳥取県中部を震源とする地震が発生し、同県倉吉市

などで震度6弱を観測した。(『毎日新聞』2016年10月21日)

でもテレビのニュースを聞くと、これが次のように変わっているのに気がつくはずです。アナウンサーの言葉は「話し言葉」だからです。

気象庁によりますと、21日午後2時7分ごろ、鳥取県中部を震源とする地震が発生し、同県倉吉市などで震度6弱を観測しました。

もちろん特殊な効果を出すために、話し言葉でも「である」調を使うとか、書き言葉に「です・ます」調を使う場合もあります。また両者を意図的に混ぜて使う場合もあります。しかし、原則として日本語では、話し言葉=「です・ます」調、書き言葉=「である調」と覚えておきましょう。通訳者は話し言葉を使うので、「です・ます」調を使います。

日本人学生がこうした混同をするのは意外かもしれないが、おそらく大学の英文和訳の授業で「である調」の訳文で答えるのに慣れているので、その癖が出たためと考えられる。また留学生は単に「である調」「ですます調」を混同した可能性がある。いずれにせよ、両クラスの授業で、一定の頻度で、こうした混同が出るのというのは興味深い事実である。

次に、留学生クラスと日本人クラスを比べて、留学生クラス特有の問題点はあるか、という問いに移ろう。これが本稿の主題となる。外国人留学生には、たとえ日本語能力試験N1(最高級)を取得していても、そして日常会話で何ら日本人と変わらない日本語を駆使していても、英→日通訳の訳出の際にある特徴が見られるのである。それはなんであろうか。例えば次の英語を見てもらいたい。

As the economy has expanded, the signs of stress on the environment have multiplied. We see these signs of stress everywhere. Shrinking forests and desertification, rises in temperature, disappearing species, eroding soils, falling water tables, rivers that run dry so forth. [1)]

この文章のShrinking forests以下を留学生に訳させると、次のように訳す者が少なくない。

森が少なくなり、砂漠が増え、気温が上がり、生き物がいなくなり、土が削られ、地下の水が下がり、川の水が乾いてしまうのです。

十分に日本語として通じる訳文である。聞いていて非常にわかりやすいので、素晴らしいとさえ思う。しかし筆者が知るプロ通訳の基準からすると、以下のように訳出することが好ましい。

森林の減少と砂漠化、気温上昇(温暖化)、種の消滅、土壌の浸食、地下水面の低下、河川の干上がりなどです。[2)]

また英語のスピーチの最後では“Thank you for listening.”と締めくくることが多いが、これを「聞いてくださってありがとうございます」と訳す留学生が多い。非常にわかりやすい日本語なのだが、やはり通訳現場の標準にあてはめると、「ご清聴ありがとうございます」と訳出するのが好ましいのである。もうここまで書くとお分かりになったと思うが、日本人学生と比べて留学生の訳出でいつも気が付くことは、「漢語（字音語）を十分に使えない」ということなのである。

これをどのように指導、説明したら留学生に理解してもらえるだろうか。「習うより慣れろ」で、日本に滞在し日本語に多く触れることでこの問題は解決するのだろうか。授業で「この表現を覚えなさい」「漢語を使いなさい」のような一方的な指示ではなく、何か筋道をつけて説明できないだろうか。そして時間はかかるにせよ、最終的にプロ通訳者が現場で使うような、フォーマルな日本語表現を使えるように彼らを導けないだろうか――。この授業中にぶつかった問題点とそれを何とか解決できないか、という筆者の度重なる思いが本稿の出発点にある。

本稿では、「固有語」「高級語彙」という観点から、日本語の口頭表現、特に英→日通訳の際に好ましい和語（大和言葉）と漢語（字音語）の使い分けがあるのかどうかについて考察していく。本センターの通訳の授業は、日本語、英語能力ともレベルの高い留学生を対象にしているので、日本語と英語を対比しながら説明するのが効果的なようだ。したがって、できるだけ日英比較をしながら、留学生の理解が深まり、学習効果が上がるような説明を考えたい。

1．「語種」とはどういうものか

前節で、和語、漢語という語を使用したが、整理のためにまず「語種」について定義を確認したい。『新選国語辞典』第 9 版（小学館）の裏表紙見返しを見ると、収録語の「語種」を和語、漢語、外来語の 3 種とその組み合わせである混種語に分類して説明している。以下、同辞典から引用する。

和語…大和言葉（やまとことば）とも呼ばれる。長い年月にわたり、私たちの祖先が語り継いできて、現代日本語の基本となっていることば。（「花」「心」「生きる」「美しい」「うららか」など）

漢語…近代以前に中国から入り、漢字を中国ふうに読む（音読する）ことば。（「世界」「人間」「文化」「自然」など）。および、それにならって日本で造語したことば。（「火事」「出張」「新聞」「演説」「野球」「映画」など）

外来語…中国以外の外国から、16世紀半ば以降に日本に伝わり、その後日本語として定着した、主に西洋諸国から入ったことば。（「カステラ」「ゴム」「オムレツ」「ガーゼ」「ロケット」など）

混種語…出自の異なる構成要素から成り立っていることば。

「和語」と「漢語」（「荷物」（和＋漢）「台所」（漢＋和）など）

「和語」と「外来語」（「生ビール」（和＋外）「ドル箱」（外＋和）など）

「漢語」と「外来語」（「あんパン」（漢＋外）「ミキサー車」（外＋漢）など）

同辞典には、収録している一般語76,536語のうち、和語33.2%（26,365語）、漢語49.4%（37,834語）、外来語9.0%（6,886語）、混種語8.4%（6,451語）の比率であったことが記されている。大雑把に言えば、和語が3割強、漢語が約5割、外来語が1割弱、混種語が1割弱の比率だったと考えていいだろう。

なお、テキストによって、語種の構成は若干異なってくる。たとえば、山口昌也・茂木俊伸・桐生りか・田中牧郎（2004）は2002年の毎日新聞1年分のデータを分析しているが、それによれば、和語38.60%、漢語54.85%、外来語5.10%、混種語1.45%という結果が出ており、特に外来語と混種語の比率が低い。双方の結果を総合すると、和語、漢語を合わせて日本語の8－9割を占めると考えれば実態に近いと思われる。

また、留学生には、漢字表記、ひらがな表記に関係なく、音読みの語（昔の中国語の音を日本人が真似した語）が漢語であり、日本人がもともと使用していたindigenous languageが大和言葉である、と説明している。たとえば、「世界」と漢字で表記しても、「せかい」とひらがなで表記しても漢語であり、「美しい」と漢字で書いても「うつくしい」とひらがなで標記しても大和言葉であることに変わりはない。

2．固有語と高級語彙

次に、一言語の中の固有語と高級語彙とは何かを見ていきたい。鈴木孝夫（1990）は「高級語彙」という言葉を使って、日英両語の興味深い事実を指摘している。鈴木の言う「高級語彙」とはなんだろうか。

> どの文明語にも、日常生活の中で使う易しいことば、つまり基本語彙と、主として学者や専門家が用いる難しいことば、つまり高級語彙の区別がある。実際問題としては、この二種の語彙の境界は必ずしも明瞭とはいえないが、大まかに分類することはできよう。（p.123）

> 英語では、高級な語彙のほとんどすべてが、古典語であるラテン語あるいはギリシャ語に由来する造語要素から成り立っている……。（p.117）

鈴木は、英語の高級語彙の例として、claustrophobia（閉所恐怖症、ラテン語由来）、seismograph（地震計、ギリシャ語由来）、pithecanthropus（ピテカントロプス、ギリシャ語由来）など、一般人には親しみにくい専門語の例を挙げている。実は英語の場合、日常語でもラテン語由来の語を高級語彙として多用しているのだが、鈴木はそのことには触れていない。筆者は、授業では留学生に次のように説明している。

英語では、ゲルマン系の語が固有語で、ギリシャ・ラテン系の語が高級語彙だと考えられる。たとえば、“I get it.”“I understand.”（わかった）はゲルマン系の語get, understandを使っているので、わかりやすいけれど、あまりフォーマルとは感じられない。“I comprehend.”とラテン系の語comprehendを使うとぐっとフォーマルな感じがしてくるね。10 minutes <u>before</u> the performanceとゲルマン系の語を使うよりも10 minutes <u>prior</u> to the performanceとラテン語で言った方が正式な感じがする。alsoをより正式に感じさせるためにはin <u>addition</u>とラテン語

を使った方がよい[3)]。星座名も「水瓶座」をWater Bearerでは締まらない。Aquariusとラテン語を使うと神秘的な感じがするだろう。注意してみると、こうした高級語彙はみなさんの母語にもあるはずだよ。

通訳の授業で高級語彙について話すと、出身が西洋であれ東洋であれ、ほとんどの留学生からうなずく顔、納得する反応が見られる。中国、韓国、北朝鮮、日本、ベトナムなどは漢字文化圏（過去に漢字を使用していた国も含む）であるが、東アジア全体を見ると、漢字あるいはサンスクリットを高級語彙として使用する国が多いようだ[4)]。タイからの留学生に聞くと、タイ語は高級語彙としてサンスクリットとパーリ語を使用するという。以下は、現在大阪大学大学院言語文化研究科後期博士課程に在学しているSaranya Choochotkaewさんに訊いたものである。（以下引用、本人に掲載許諾済み）

タイ語の高級語彙は、サンスクリット（梵語）とパーリ語です。サンスクリットとパーリ語はタイ文字で表記します。どのような場面に使うかというと、
(1) 丁寧語、特に王族専用語があります。
(2) 外来語をタイ語に訳した場合です。例えば、science→witthayasat
(3) 固有名詞（人、場所の名前）です。例えば、Chulalongkorn Mahawitthayalai（チュラーロンコーン大学）の、Chulalongkornはチュラーロンコーン大王（ラーマ5世）に由来しますが、Mahawitthayalai（大学）とともにパーリ語です。なぜそうなったのかですが、仏教の経典と王家制度はインド由来だからだと思います。お経の言葉は梵語なので、タイ人には、力がある言葉のように聞こえます。

3．日本語＝テレビ型言語、英語＝ラジオ型言語

日本語と英語を比較すると、英語のゲルマン系語彙に相当する固有語が日本語では大和言葉（和語）で、ギリシャ、ラテン系の高級語彙に相当するのが、漢語（字音語）と考えられる。ただし、日本語の場合、漢字の音読み・訓読みを通じて和語と漢語が離れがたく結びついているところが、英語と違うところである。これを鈴木（1990）は「テレビ型言語」と呼ぶ。一方、鈴木は、英語など表音文字を使う言語を「ラジオ型言語」と呼んでいる。

……日本語は音声と映像という二つの異質な伝達刺戟を必要とするテレビ型の言語であり、これに比べると西欧の諸言語は音声にほとんどすべての必要な情報を託すラジオ型の言語だ……。（p.180）

鈴木（2014）は日本語には無数の同音異義語があるが、それを混同しないですむのは、日本語が、音声を聞いてそれに相当する漢字を思い浮かべる、「テレビ型言語」であるおかげだと主張する。

……日本語は一体どのような言語ですかと外国の人に聞かれたとき、何はさておき**同音異義の言葉がとても多い言語ですと**、半ば冗談に答えても決して嘘ではありません。そしてこの

ようなたくさんの同音語を、ごく普通の人たちが日常の言語生活で、**さしたる混乱も不便もなく使えていること**の訳は、発音は同じでも別々の漢字が用いられているからだということを、言語学者ならずとも日本人なら誰でも薄々知っているからです。

例えば《しりつ／しりつ》、《かがくしゃ／かがくしゃ》、《すいせい／すいせい》でも、その漢字表記が異なりさえすれば、これらはどちらもちゃんとした日本語として、学問の世界では勿論、言葉を主として口頭で用いる日常生活の中でさえ、良く使われる普通の語彙として立派に存在できます。

このような伝達行為は、音声だけでなく、音声に文字（画像）という視覚的な刺激が加わって成立していることは明らかです。まさにこのことが《日本語は（ラジオではなく）テレビ型の言語だ》と私がいうことの意味なのです。(p.194)

4．日本語における固有語と高級語彙の役割分担

1993年に大相撲の貴乃花が大関昇進時の口上で使用して以来、相撲の世界では難解な四字熟語を使うことがブームになっているようだ。1994年に貴乃花が横綱昇進の際に使った言葉を分析してみよう。音声のみで聞いたときにどのように聞こえるかを実感してもらうために以下ひらがな表記で記す。

すもーどーに　ふしゃくしんみょーをつらぬく　しょぞんです（26文字）

教養のある日本人であれば、頭の中で瞬時に漢字を思い浮かべて理解するはずだ。そうしないと、音声だけでは理解しにくい。「テレビ型言語」とは音声と映像（漢字）が表裏一体となっていて、音声に相当する漢字をある程度思い浮かべなければ、意味内容を理解しにくい言語と考えればいいだろう。実際、上記の口上を以下のように漢字かな混じり文にしてしまえば、一部の漢字の読みができなくても一瞬にして意味は明瞭になる。

相撲道に不惜身命を貫く所存です

この文の漢語に下線をつけてみよう。

相撲<u>道</u>に<u>不惜身命</u>を貫く<u>所存</u>です

ひらがな表記で考えてみると、26文字中15文字を漢語が占めていることになる。つまり漢語使用率57.7％である[5)]。「不惜身命」という難解な熟語は、普通の日本人でも聞いただけでは一瞬理解できない。漢字を見るか、頭の中でぼんやりと漢字を思い浮かべて、やっと理解できるレベルである。

それでは、この文をできるだけ大和言葉に直して、ほぼ同じ意味の文を作ってみよう。やはり音声で聞いたときにどのように聞こえるかを体感してもらうためにひらがな表記をする。

すもーのみちに　からだもいのちも　おしまないで　がんばるつもりです（30文字）

これならひらがな標記だけでもすみずみまで理解できる。ただし決してフォーマルな日本語には聞こえない。この文を下記のように漢字かな混じり文にしても理解度はそれほど変わらない。

相撲の道に体も命も惜しまないで頑張るつもりです

この中で漢語はわずかに「頑」一語のみである。ひらがな表記で考えると30文字中 2 文字、つまり漢語の割合はわずかに6.7%である。もう一つ例を出そう。以下は通訳の頻出表現として取り上げている例文である。

かんけいしゃのかたがたの　ごこういにたいし　ちゅーしんより　おれいもうしあげます
関係者の方々のご厚意に対し衷心よりお礼申し上げます

ひらがな36字中22語が漢語となるので、漢語比率は61%と異常に高い。全体的に音を聞いただけでは意味が分かりにくい。特に「ちゅーしん」は同音異義語が「中心」をはじめ多数あり、なんとなくでも漢字を思い浮かべられないと日本語母語話者でもぴんと来ないかもしれない。しかし、この「ちゅうしん」を「こころから」と大和言葉にしてしまえばぐっとわかりやすくなる。

かんけいしゃのかたがたの　ごこういにたいし　こころから　おれいもうしあげます

次に冒頭でも取り上げた“Thank you for listening.”の訳出例を二つ挙げて漢語の比率を考えたい。

きいてくださって　ありがとうございます（漢語比率11.1%）
ごせいちょう　ありがとうございます（漢語比率50%）

「清聴」という漢語が混じるとたちまち、フォーマルな感じがしてくる。漢語比率が高まれば高まるほど、フォーマルに聞こえてくる。ただし、音声で聞いた限りでは、意味内容は逆にわかりにくくなることに注意したい。このほかにも、通訳の授業では、「教えてください」ではなく「ご教示ください」とか「ご指導お願いします」という表現を指導するが、これがフォーマルに聞こえるのは、日本語の高級語彙である漢語の力であると話すと留学生を説得しやすい。

冒頭でも挙げた、環境関連の英文の訳例二つも、ひらがな標記で再掲しよう。通訳の基準から好ましいと私が判断した後者の訳出例は漢語比率が以上に高いことがわかるだろう。

もりがすくなくなり　さばくがふえ　きおんがあがり　いきものがいなくなり　つちがけずられ　ちかのみずがさがり　かわのみずがかわいてしまうのです
（64語中漢語 8 語、漢語比率12.5%）
しんりんのげんしょーと　さばくか　きおんじょーしょー　しゅのしょーめつ　どじょーの

しんしょく　ちかすいめんのていか　かせんのひあがりなどです
（64語中50語漢語、漢語比率78.1%）

以下は通訳の授業での実際例である。

教師：次は、会社を訪問したグループに対する受け入れ側のあいさつだと思ってほしい。さて、どう訳す？　We are extremely happy to have you with us today.
留学生Ａ：今日はおいでいただき大変うれしく思っております。
教師：すばらしい日本語だね。わかりやすいくていい。ほかに？
留学生Ｂ：本日は弊社をご訪問いただき、衷心よりお礼申し上げます。
教師：いやあ、すごい日本語が出てきたね（笑)。「ほんじつ」「ごほうもん」「へいしゃ」「ちゅうしん」「れい」という漢語が効いているね。特に「へいしゃ」「ちゅうしん」は聞いただけではよくわからない漢語だと思う。敬語はもちろんだけれど、漢語、特に漢字を思い浮かべないとちょっとわからないような漢語を使うとかなりフォーマルな日本語表現になることがわかると思う。皆さんが、通訳の現場でこんな日本語で通訳したら、日本人の聴衆はぶっとぶよ（一同笑)。日本人の大学生だって使えないからね。

それでは本節の考察をまとめよう。和語（大和言葉）を使うとわかりやすい反面、フォーマルさが失われる。一方漢語を使うとフォーマルになるけれど、意味が伝わりにくくなる。いわば「二律背反の関係」にあるといえる。通訳の訳出という側面ではどの程度の高級語彙を使えばいいかと断定することは難しいが、漢語比率が高いほどフォーマルな感じがするのは間違いない。例で挙げたように、日本語の高級語彙である中国語＝漢語（字音語）の割合を増やしていくとフォーマルな口頭表現に直結してくる。このあたりは、英語をはじめ世界の多くの言語で共通の事情といえるだろう。

最後に本稿でこれまでに考察した固有語と高級語彙の日英比較を表にまとめると次のようになる。

	由来語	理解度	使用する状況	日英の対照実例
固有語	ゲルマン系語（英） 大和言葉（日）	聞いてわかりやすい。	日常的、informalな状況で使う	get, understand, before, also, Water Bearer（英） 聞く、心から、教える、始める（日）
高級語彙	古典ギリシャ語、ラテン語（英） 中国語（漢語、字音語）（日）	聞いてわかりにくい。	格式ばった、formalな状況、専門語などで使うことが多い。	comprehend, prior to, in addition, Aquarius（英） 清聴、衷心、教示、開始（日）

表　日英の固有語・高級語彙の比較

なお鈴木（1990）が指摘するように、英語の高級語彙は、読んでも聞いてもわかりにくいが、日本語の場合は、漢字の音読み、訓読みという両面性があるため、漢字をわずかでも思い浮かべることができれば意味は容易に推察できる、という違いはある（p.120)。しかし漢語であれ

ば、聞いてわかりにくいかといえば必ずしもそうではないようだ。たとえば「あいさつ」という語は漢語であるが、あまりにも頻繁に使用されるし、同音異義語がないので、和語と変わらないほど聞いて理解しやすいといえる。「漢語が聞いてわかりにくい」というのはあくまで一般論で例外もあることは指摘しておきたい。

5．漢字の音読み、訓読みの説明

本節では、筆者が授業中に行った漢字に関する説明を紹介したい。

授業中に、漢字の説明をすることがある。中国人留学生の多くは、なぜ漢字に音読みが数種類あり、訓読みまであるのか疑問に思っていることが多い。なぜなら中国語は「一字一音」が原則だからだ（もちろん例外もある）。たとえば、「日」は現代中国語では、拼音でrìと発音する。一字一音の漢字が、日本語になると複数の読みが生じることを不思議に思うようだ。

教師：（ホワイトボードに「11月３日は、祝日で日曜日です」と書く[6]）みなさんこれはどう読みますか
留学生Ａ：じゅういちがつ　みっかは、しゅくじつで、にちようびです、でしょう？
教師：その通り。このクラスは日本語上級者ばかりが受講しているから、正しく読めない人はいないですね。でも、この中で「日」という漢字に注目してごらん。順番に「か、じつ、にち、び」と読み方が変化している。中国から来た留学生はここが不思議に思うらしいね。中国語は原則一字一音だから。なんで日本語では同じ漢字の読みがこんなにたくさんあるのかって思うらしい。皆さん、漢字には訓読みと音読みがあると習ったと思うけど、この中の「じつ、にち」というのは音読みで、音読みというのは、もともとは中国語の発音なんだよ。
留学生Ｂ（中国人）：うそだ！
教師：うそじゃないよ（笑）。現代中国語では発音は違うからね。別の例を出そう。（ホワイトボードに「山」と書く）これは何と読む？
留学生Ｃ：「やま」です。
教師：その「やま」という読み方は、日本語の固有語、indigenous languageだ。中国は古代の東アジアでは飛びぬけた文明国、先進国だったんだよ。このクラスには、ヨーロッパ人が多いけど、古代のヨーロッパではローマ帝国が飛びぬけた文明国だったから、現在のヨーロッパでも文字はローマ字（ラテン文字）が使われているし、宗教もローマ帝国の国教であったキリスト教が引き継がれているといえる。古代の東アジアでは中国がローマに相当する大文明だったから、その当時の中国の文字、漢字、宗教（＝仏教）が東アジアに今でも広まっていると考えていいだろうね。

古代の日本は後進国だったから、文字はなかった。そこで、当時の最先進国だった中国から文字を輸入したわけだ。山という文字を見て、最初は中国風に発音していたはずだ。しかしどうもこれは日本語の固有語「やま」に相当するらしいというので、山を中国語ではなく「やま」と読んだ。それが訓読みだね[7]。

さて、日本の文化黎明期には、当時先進国だった唐に日本から留学生が派遣されていた。皆さんのような、エリートの国費留学生を考えればいいね。その留学生が本場の唐へ行って、当時発音されていた「山」を聞いて日本に持ち帰った。今で言えば、英語学習者が本場イギリス

に行ってクイーンズイングリッシュを学んだと思えばいい[8)]。しかし日本にいる普通の日本人は声調のある複雑な中国語の発音をそのまま発音できないから、日本語風に「サン」と発音したんだ。これはたとえば英語のChristmasが日本語になるとkurisumasuと発音するようなものだ。中国人はまさかこれがもともと中国語の発音だとは夢にも思わないだろうね。日本式に訛った発音といってもいいかな。中国人が発音する「山」を日本人は「サン」と読み、音読みとして残したんだよ。もちろん唐の時代以前から日本は中国とは交流があって漢字は流入していたけれど、時代と場所によって中国語も発音が変わる[9)]。唐以前に中国の南部、呉の地方から伝わった発音では、「山」は「セン」と日本人には聞こえた。そこで、山を「セン」とも読むんだ（「うそだ！」と叫んだ中国人留学生も納得の顔つきをする。）時代、地方によって変わった中国語の発音を日本化して残しているのが、日本語の漢字の音読みなんだよ。なお、唐の時代７，８世紀に伝わった漢字音を「漢音」、それ以前に中国の南部、呉の地方からを伝わったものを「呉音」、鎌倉時代以降、中国では明、清のはじめ頃に禅僧や貿易商人らによって伝えられたものを「唐宋音」といって区別したりします。山の音読み「セン」は呉音、「サン」は漢音だね。

日本語教育に携わっている方には、当たり前の説明かもしれない。しかし留学生の多くは「目から鱗が落ちた」という顔で聞いている。「やはりみんな疑問に思っていたんだ」と思わず膝を打ちたくなる。筆者は、授業の履修登録が終わってから、できるだけ早いうちに、機会をとらえて、日本語の漢字に多くの読みがある理由を説明することにしている。そしてそれに関連して高級語彙と固有語も説明するという手法を取っている。それが留学生にとって一番理解しやすく効果的な方法のようである。

終わりに

本稿では、語種を手掛かりに、日本語の固有語と高級語彙の使い分け、それによる日本語の口頭表現におけるフォーマルな言い回しについて考察した。（敬語の使用は日本語のフォーマルな表現につながるのは間違いないが、本稿では敬語を除外し、固有語と高級語彙のみに絞り考察したことをお断りしたい。）

本稿の分析は、日本人にとっては感覚的に当たり前のことかもしれない。しかしこうした母語話者にとって造作もないことを論理的、分析的に説明することは、留学生教育には大切なことのように思われる。なぜなら私たち日本語母語話者は論理、分析力が発達していない幼少の時から日本語を、いわば疑問なしに学ぶが、留学生は、論理、分析力が発達し、「なぜか」という疑問が湧いてくる大学生の年頃に日本語を学ぶからである。語学の学習に反復練習が欠かせないことはいうまでもないが、大学生の年齢に達した学習者には、理解を飛ばして無理やり覚えさせるよりも、論理的、分析的に説明された事柄を覚える方が、はるかに受け入れやすいのは言うまでもないだろう。

本稿は授業で留学生と接する中で生まれたものであり、本センターで教える機会がなければ、決して思いつかなかったものである。その意味で筆者が本センターで教える機会を与えてくださった先生方に深く感謝したい。本稿が留学生教育の一助となれば幸いである。

注

1）水野・鍵村（2005）p.17

2）同書別冊「テキストの使い方・模範通訳例」p.28を改変したもの。

3）この記述は、倉谷（1977）を一部参考にしている。倉谷は、日本語の大和言葉と漢語の関係、英語におけるゲルマン語とラテン語の関係の類似性を同書で以下のように指摘している。

一般的に、大和言葉と同じでサクソン本来の単語は意味範囲は広いものです。たとえばhaveに対応するラテン系英語をひろってみると、possess, contain, embody, include, involve, comprehend, acquire, obtain, procure, sustain, control, apprehendと際限なくある、いいかえると、ラテン系の単語は定義がはっきりしていてプリサイス、ちょうど和語に対する漢語の関係と同じです。「もつ」一語に対して、所持、把握、保持、携帯、所有、維持、負担、等際限がないのと同じです。（pp.124-125）

これは実に鋭い指摘である。この理屈を援用すると、日常的に使用する日本語の動詞にいくつもの漢字を充てられる理由、いわゆる「同訓異字」の長所を留学生に簡単に説明できるだろう。例えば、日本語の「とる」に「取る」「執る」「撮る」「採る」「捕る」「獲る」「盗る」などの漢字を充てているのは、固有語（大和言葉）「とる」の意味が広いため、高級語彙である中国語から定義のはっきりした漢字を借用して、意味を明確にしている、と説明できる。読みは固有語なのに、高級語彙の多様な定義も使えるという一石二鳥の離れ業である。これを英語にあてはめると、haveという発音は変わらずに、possessやcontainなど多数の明確な意味も表記できる方法ということになるが、表音文字では不可能である。こう考えると日本語で漢字の訓読みを常時採用した利便さ、長所が明確になる。

4）漢字文化圏の歴史的経緯については、金（2010）の以下の記述がわかりやすい。

……中国、日本、韓国、ヴェトナム、それに北朝鮮が、歴史的に漢字を使用してきたいわゆる漢字文化圏であるが、……漢字文化圏における漢字の使われ方はきわめて複雑である。 まずヴェトナムと北朝鮮は漢字を全廃、韓国もほとんど使わなくなり、ヴェトナムでは、chữ quốc ngữと呼ばれるアルファベット、韓国と北朝鮮ではハングルが用いられている。ただし文字としての漢字は使われないが、漢字に由来する言葉は、この二つの言語において依然として高い比率を占めている。（p.7）

ヴェトナムは1845年以降、漢字を完全に廃止、chữ quốc ngữと呼ばれるアルファベットをもっぱら使用しているため、一般にこのようなことはわかりづらくなっているが、ヴェトナム語の語彙の約60パーセントは、実は漢字に由来する言葉である。（p.6）

5）国立国語研究所では、「語」（形態素）の単位で、『新選国語辞典』では見出し語の単位で語種のパーセンテージを出しているが、本稿では試みに、ひらがな標記をもとにパーセンテージを出した。長音符（ー）も一字に含めている。この方が音声で聞いた時の漢語の比率が感覚的に再現できるのではないか、と筆者が考えたためである。

6）これは筆者が考案した例文ではない。高島（2001）で、「11月の 3 日は祝日で、ちょうど日曜日です」（p.44）という例文を載せている。筆者は、これをほぼそのまま授業で使用している。

7）笹原（2008）は漢字の伝来と、訓読みの始まりの時期について以下のように記述している。

漢字は、紀元前後より中国から日本に伝来し、遅くとも 5 世紀から 6 世紀頃には本格的に伝播し始めた。朝鮮半島を経由することもあった。この直後に、訓読みも生まれたようである。（p.13）

8）漢音をクイーンズイングリッシュに例える説明は高島（2001）p.38 を参考にしている（ただし高島は、クイーンズイングリッシュではなく「キングスイングリッシュ」と言っている。）この例えは、留学生にわかりやすく受けが良い。必ず笑いと頷きが返ってくる。

9）中国語の発音だけでなく、日本語の発音も時代とともに変化しているので、問題は単純ではない。同書では、漢語「急」は大陸ではkipと発音されていたが、日本に入ってきて母音uが付きkipuとなり、さらにkifu、kiuと変化し、最後に長音化してkyūという現在の発音に至った経緯が書かれている（pp.67-69）。本稿では留学生にわかりやすく説明するために、説明を簡略化している。

参考文献

金文京（2010）『漢文と東アジア』岩波書店

金田一京助・佐伯梅友・大石初太郎・野村雅昭編（2011）『新選国語辞典』第 9 版、小学館

倉谷直臣（1977）『英会話上達法』講談社

水野真木子・鍵村和子（2005）『Let's Interpret通訳実践トレーニング』大阪教育図書

笹原宏之（2008）『訓読みのはなし　漢字文化圏の中の日本語』光文社

鈴木孝夫（1990）『日本語と外国語』鈴木孝夫著作集 5 、岩波書店

鈴木孝夫（2014）『日本人の感性が世界を変える』新潮社

高島俊夫（2001）『漢字と日本人』文藝春秋

山口昌也・茂木俊伸・桐生りか・田中牧郎（2004）「語種との関係に基づいた新聞記事における語彙の時間的変化分析」『社会言語科学会第13回大会発表論文集』

（おぐら　よしろう　大阪府立大学教授、本センター非常勤講師）